教育者としての「使命感」・「人間愛」・「創造力」を有する教員の養成を目指す

JUEN

【ジュエン】

Joetsu University of EducatioN

2016 春 No.33

国立大学法人 上越教育大学 Joetsu University of EducatioN

学園だより

［特集］対談

地域に密着した地域の核となる大学を目指して

佐藤芳徳 上越教育大学長 × 村山秀幸 上越市長

上教大サイコー!!

様々な体験で自分を成長させる

上教大では机上での学びも多くありましたが、体験からもたくさんの学びがありました。

子どもとの関わりから

私は「学びのひろば」という活動に３年間参加し、子どもと関わってきました。初めのうちは活動を運営すること、子どもと話すことだけで精一杯でした。しかし、活動を通していくうちに活動内容や、言葉のかけ方に工夫をすることによって子どもの興味や、やる気を引き出すことが大切だと気づくことができました。

また、「学校ボランティアB」という授業では小学校の授業に参加したり、授業をさせていただいたりしています。小学校実習を終え、もっといろいろな先生の授業が見たい、自分の力がどれだけついたのか試したいという気持ちでボランティアに参加しました。授業の方法や、話し方など毎回が新たな発見の連続で、未熟な自分に反省してばかりですが、子どもの「わかった！」の声に喜びを感じつつ、多くのことを学んでいます。

部活動から

私はバレーボール部に所属しています。初めの頃、私たちのチームは試合で悔しい思いをしてばかりでした。しかし、練習を重ねていくうちに上位のチームと熱い試合をできるようになり、努力の大切さを知ることができました。現在は部長をやらせていただいております。リーダーであることやチームを運営することに難しさを感じながら、良いリーダーとはどのような人なのかを学んでいます。

「感謝」と「継続は力なり」

このような様々な体験には、親、友人、先生方など多くの人の支えが必要不可欠でした。私を支えてくれる人たちに感謝をしつつ、夢である教師を目指して、これからも多くの体験を通して自分を育てていきたいと思います。

学部３年
自然系コース（理科）
古屋（ふるや）　信幸（のぶゆき）さん

＊学びのひろば
「学びのひろば」は、平成10年度に上越教育大学フレンドシップ事業の一環として始まり、「学生が子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、教員としての実践的指導力の基礎を身につける」ことを目的に実施してきた事業です。
活動の企画・運営は、すべて学生が中心となって行い、所属する９つのクラブが「子どもたちの笑顔」のため徹底的な議論を重ね、年７回の活動日に、近隣の小学校に通う子どもたちとレクリエーションや野外活動、工作、運動、２泊３日の宿泊活動などを実施しています。

研究室へようこそ

「発酵のまち上越」で「和食」を学ぶ

豪雪地帯にある大学との出会いは…

今から30年以上前の話になります。私がまだ受験生だった頃、何気なく眺めていたテレビから「豪雪のため共通一次試験（今のセンター試験）の開始時間が遅れた会場がある」とのニュースが流れました。当時、雪とは無縁の生活を送っていた私にとっては「どこ?」という感じでしたが、その試験会場こそが上越教育大学であり、数年後、自分がそこに就職することになろうとは夢にも思いませんでした。

上越市は発酵のまち

私は、生活・健康系コースの「家庭」に所属していて、食物に関する講義や実験・実習を担当しています。現在の研究テーマは、「発酵食品」を基盤とした食育活動プログラムの開発です。上杉謙信や妙高山で知られる上越市は、発酵のまちとしても有名です。ここには、みそ、しょう油、清酒、漬け物といった伝統的な「発酵食品」があり、多くのみそ蔵や酒蔵を目にすることができます。日本のワインぶどうの父・川上善兵衛氏や、酒博士としても知られる発酵学の権威・坂口謹一郎博士の出身地でもあり、発酵について学ぶには最適な場所です。

「発酵食品」は「和食」の基本

「和食：日本人の伝統的な食文化」が無形文化遺産に登録された今、学校の教員を目指す学生が、その根幹となる「発酵食品」について学び体験することは、たいへん意味のあることと考えます。なぜなら、教育のグローバル化が叫ばれる中、その核となるもののひとつが「和食」であり、教員には家庭科などの授業を通して「和食」に関する知識や技術を伝えるという重要な役割があるからです。

みその数だけみそ汁が

例えばみそは、小学校家庭科の教科書に必ずといっていいほど取り上げられています。「和食」の基本的な献立である一汁三菜の中心となるのもみそ汁です。各地方にはみその数だけみそ汁があります。上越の場合はスキー汁やくじら汁でしょうか。すなわち、みそ作り体験やみそ汁作りの実習を通して、その土地の食文化を知ることができるのです。発酵のまちで「発酵食品」について学び、「和食」に対する理解を深めてもらえればと考えています。

光永　伸一郎（みつなが　しんいちろう）　自然・生活教育学系　教授
専門は食物学。平成5年3月に博士（農学）の学位を取得した後、同年10月に上越教育大学の助手として着任。以来、上教大「筋22年、そして出身は東海道五十三次22番目の宿場町である静岡県藤枝市。かの徳川家康は、鷹狩に訪れていた駿河中城（現在の藤枝市）で食べた鯛の天ぷらにあたって亡くなったともいわれている（諸説あり）。上越発酵食品研究会（上越市）、坂口謹一郎博士顕彰委員会（上越市）。

地域に密着した地域の核となる大学を目指して

［特集］対談

上越市長 村山秀幸 × 上越教育大学長 佐藤芳徳

上越教育大学は地域に密着した大学ということを大きな目標としています。このたび村山秀幸上越市長と佐藤芳徳学長が、上越教育大学に期待すること、これからの教員養成に期待することなどについて対談を行いました。

Have a talk! 1

［特集×対談］

日　時■平成27年12月15日(火)16時～17時
場　所■上越市役所応接室にて

佐藤　本学は、平成30年に開学40周年を迎えるわけですが、昭和53年の大学設置に当たっては、地元上越市をはじめ地域の皆様の熱い支援が大きな力となったと聞いております。

村山　上越市として合併する前の高田市には、新潟大学教育学部高田分校がありましたが、新潟市に移転統合されることになり、文教の地としての灯を消さぬよう諸先輩の皆様が新構想大学の誘致に非常に熱心に取り組まれたようです。

佐藤　そのような経緯もありまして、本学は地域に密着した大学、ということを大きな目標としています。地域の方々の教育に対する深い理解や様々な形でのご支援には、心から感謝を申し上げる次第です。

　特に、上越市にも法人会員としてご参加いただいている「上越教育大学振興協力会」という地域の企業・団体や個人の皆様から構成される大学への支援組織を平成20年に立ち上げていただきました。本学の地域貢献活動をはじめとする諸事業や学生の就学支援など物心両面から様々な支援をいただき、それぞれの事業を継続的に推進できていることに深く感謝しております。

村山　振興協力会の総会などでも会員の方からお聞きするのですが、上越教育大学の学生さんとこういったことで関わることがあった、ということを非常にうれしそうにお話しになります。学校や教育関係ではないお仕事の方が、全く想定していなかったことで学生さんと関われたということは、市民にとって大きな喜びになっているようです。

　上越地域の核として大学があるということ、地域の景色の中に大学があるということは、極めて大きな意義を持っています。また、大学の存在は、地域の活性化や経済にも大きな効果をもたらしてくれています。

佐藤　本学は、学生が大学院・学部と合わせて約1、300人、附属学校の児童生徒が約900人、教職員も300人を超えております。そのご家族も考えるとかなりの人数となりますし、若い人が多いということは、様々な影響があるものと思っています。

　また、大学院生には全国の教育委員会から派遣されている現職教員も多く、学部生も全国から集まっておりますので、修了・卒業後にはそれぞれの地で上越市のサポーターとしての役割を担ってくれることが期待できます。

佐藤芳徳 学長　　村山秀幸 上越市長

Have a talk! 1
［特集×対談］

地域に密着した地域の核となる大学を目指して

村山　教育大学というのは、教員の専門が非常に多様で幅広い学問分野に及ぶということに驚きました。市としてのほとんどの行政分野がカバーされています。教育は当然として、郷土の童話作家である小川未明から豪雪対策、経済からデザインまでご専門にされている教員がおられるので、それぞれに関係する委員会や実際の施策などでご提案やご意見をいただけるということは本当にありがたいことです。

　また、講演会やコンサートなどの文化的活動で、直接的に市民の方々に大きな貢献を果たしていただいております。

佐藤　そうですね、教育大学というのはミニ総合大学とも言えると思います。

　大学教員は、大学の中にだけいると視野が狭くなりがちです。市の活動に関わることで、社会のニーズを肌で感ずることができますし、社会性を磨くといった資質の向上にもつながりますのでありがたいことだと思っています。

村山　これも市民の方からお聞きするのですが、上越教育大学の学生さんが大変忙しいということは分かっているのですが、もう少し時間を有効に使って街に出る機会を増やしてもらいたい、地域の活動により多く関わってもらいたい、ということを言われます。

佐藤　学生が忙しいのは間違いないと思います。本学は、実践的な力を身につけるため、学部1年生から4年生まで体系的に行われる教育実習をはじめ、学校ボランティアなど実際に学校に入って活動させていただくことが多くあります。そのための準備も必要となりますし、スポーツなどの課外活動も盛んですので学生はかなり忙しいと思います。

村山　上越で暮らす間に、できるだけこの地方の文化や歴史に触れて欲しいのです。現在、旧市街にあるいわゆる「町家」でシェアハウスして暮らしてみませんか、というプロジェクトを立ち上げたところなので、上越教育大学の学生さんにも是非参加していただきたいと思います。

　そして、協力いただいた学生さんから、そこで感じたことを基にまちの活性化に向けた意見などをもらえればと期待しています。

佐藤　おっしゃるとおり、学生には是非そういった経験を積んで欲しいと思いますし、大学としてもそういった取組を応援したいと思います。

村山　これも、大学が地域から信頼され、期待されているということの現れだと思います。

上越教育大学振興協力会とは

地域と上越教育大学をつなぐ 架け橋

　教育相談や公開講座・出前講座等の開催、学生によるボランティア活動などの地域貢献活動に積極的に取り組んでいる上越教育大学の発展・充実を物心両面から支援しようと設立された団体です。

　大学と地域とのパイプ役となり、地域に根ざした大学「上越教育大学」を支え、協力していこうと、様々な活動をしています。

　また、本学学生への支援として、経済的理由による修学困難な学生や留学生に奨学金を給付しています。

本学学生による東日本大震災へのボランティア活動を支援します。（被災地ボランティア1泊2日バスツアーの様子）

少年サッカーリーグ支援。山麓線サッカーリーグを支援し、青少年の頑張りを支えます。

講演会、文化的催し等を開催しています。

料理教室開催。会員は参加無料ですが、別途材料費をいただきます。たいへん好評をいただき、また、留学生や会員同士の交流との場となっています。

Have a talk! 2
[特集×対談]

教員養成のモデル大学を目指して

佐藤　上越教育大学は、現職教員の研修研鑽の場としての大学院も大きな柱になっております。

村山　大学院で学ぶ現職教員に他県の方がおられるということは、異なる環境で違う学びが経験できるということで、その方の学びも深まるでしょうし、実習等で受け入れる上越地域の学校側にも新たな知見が加わるということになります。

佐藤　それぞれ異なるフィールドで経験を積んだ方が、それまでと違う学びを新たに経験できますし、教育レベルがもう一段上がることにつながると期待されます。

村山　現在、学校に求められる役割が多くなっておりますので、現場の先生方は多忙で、ご家族の中に教員がおられる方からは、学校の先生がこんなに忙しいとは知らなかった、という話も聞きます。

　厳しい予算状況から、教員の数を減らすという議論もあるようですが、少子化が進んでいるとはいえ、先生方からの丁寧な指導やきめ細かいケアが必要となっている児童・生徒が増えているようです。

佐藤　近年、インクルーシブ教育システムの普及ということが求められており、本学でも数年前から学校ボランティアという授業を学部2年生の必修科目として取り入れています。

　その授業では、実習先として本学近隣の小学校のご協力をいただき、学生が支援を必要とする児童・生徒さんの様々な活動のお手伝いをさせていただいています。学校側のニーズと学生の学びをコーディネートすることは大変ですが、教員養成の早い段階からそういった経験を積ませることで大変良い成果が上がっています。

　全国に先駆けて実施した分離方式による初等教育実習や教職大学院の学校支援フィールドワークもそうですが、多くのアイデアを具体化し実施するためには、地域の教育委員会や受け入れてくださる学校のご理解とご協力が不可欠であり、そういった様々なご支援の賜といえるものだと思っております。

Have a talk! 3
[特集×対談]

これから、さらに上越教育大学に期待すること

佐藤　国立大学が法人化されて、今年度で第2期目の中期計画期間が終了します。次年度からは第3期の6年間を迎えることになります。既に様々な形で報道されておりますとおり、予算的には大変厳しい状況が続いていることや組織の見直し等の改革が求められております。

　一方、地方創生に関連して、さらなる連携の形が求められると考えておりますが、地域の中で本学が果たすべき役割についてはいかがでしょうか。

村山　上越教育大学が教員養成のモデルとなるような様々な先駆的取組を実践されていることは、教育関係者の中では十分認知されていると思いますし、市内の全小・中学校でコミュニティ・スクールを導入した際にも積極的にご協力いただいております。

　ただ、一般の市民からすると、やはり大学というところは敷居が高いように感じておられる方が多いようです。地域に根ざした大学として、多くの市民が大学を身近な存在として感じられるような取組を増やしていただきたいと思います。例えば、一般の市民が学生食堂を利用できるようなオープンデーを決めてPRする、というようなことはいかがでしょうか。

佐藤　現在でも大学の食堂や売店といった施設を利用することに制限はかけておりませんが、セキュリティー面も配慮しないわけにはいきませんので難しいところもございます。

　附属図書館では、一般の市民の方にご登録いただければ、図書館の利用や図書の貸し出しができるようになっておりますので是非ご利用いただきたいと思います。小さなお子様とご一緒に図書館を利用いただくことなども検討しておりますが、こういった取組を市民の皆さんに知っていただくようなPRが不足していることがあると思いますので今後工夫していきたいと思います。

　本学の学生と地域の子どもさん達との交流の場となっている「学びのひろば」や教育実習等で学生達と直接関わった経験のある子どもたちが成長されておられます。そういった方々が成人されて本学に親しみを持って、本学と共に活動の場を広げていってくれることを心から期待しています。

　本日はお忙しいところ、対談にご協力いただき、本当にありがとうございました。

学生がつくる 上教大生のひろば

実は結構気になる!? みんなのカバンの中身!

What's inside?

❶ お気に入りのもの
❷ どうしてお気に入りなの??
❸ そのかばんでどこに行きたい?
❹ 一言

為国 翔太
学部2年 自然系コース(数学)

❶はさみ
❷小学校の先生を目指す学校なので、はさみを使う頻度が多いので持っておくと便利!!
❸雨風に強いから登山とかしてみたいな!
❹そろそろカバンを変えようと思っています。

金子 美沙紀
学部4年 自然系コース(数学)

❶ポーチ
❷友達にもらった大切なもの
❸沖縄
❹リュックはものがいっぱい入るから好き〜!!

飯塚 陽
学部2年 言語系コース(国語)

❶ペンギンのUSBケース
❷水族館のお土産でもらったペンギンの入れ物。ちょうどいいサイズだったので、USBケースにしちゃいました。
❸築地
❹雑に扱ってごめんね。

井田 紋乃
学部1年 D4

❶三ツ矢サイダー梅キーケース
❷さっき買ったらおいしかった!! フラガールがかわいいから!
❸文房具しか持ってないので大学(笑)
❹軽いのが一番!

広瀬 亮太
学部1年 B3

❶歯ブラシ
❷程よいフィット感が◎
❸程よい清潔感のある所
❹だいぶ使い込んで汚れてきたから漂白したいですね!!

山岸 大輔
学部3年
生活・健康系コース(保健体育)

❶ぷーさんの充電器
❷どこに行くのにも持ち歩いています!!
❸沖縄かな
❹これからも大事にします!

山本 夏海
学部3年 幼児教育コース

❶手帳
❷ずっとほしかったAIUEOさんの手帳で、どこに行っても売ってなかったからネットで買った(^^)/
❸温泉!!!!
❹女子力を高めたい!!

編集後記

カバンの中身を知ることができて、とてもおもしろかったです。
ご協力してくれたみなさん
ありがとうございました!

小堺 ひかり　学部2年　学校臨床コース(学習臨床)
白川 真紀　学部2年　言語系コース(国語)

持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成

―グローバル人材育成科・6つのアビリティー―

高度情報社会、グローバル社会、成熟社会という言葉に象徴されるように、現代社会は世界的規模で劇的に変化し続けています。

当校では平成27年度までの3年間、情報活用力・コミュニケーション力の育成に焦点化し研究を行ってきました。その結果、変化を続ける時代だからこそ、これらの力を重視しつつも、これからの社会を創り上げ、歩むべき道を自ら切り拓く人材を育成すべきであるという結論に至りました。

そこで私たちは、研究主題「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成」を掲げ、「グローバル人材育成科」を新設するとともに、こうした人材に育成すべき資質・能力を6つに定義しました。これらの資質・能力は、中央教育審議会などの研究報告書や当校の研究成果を基に、これから求められる資質・能力を、【情報統合力・代替思考力・企画創造力・主体的実践力・コミュニケーション力・コラボレーション力】の6つに整理したもので、「アビリティ」と名付けました。教育課程全体を効果的に編成し、グローバル人材の育成を目指します。

平成28年度は、平成30年度までの文部科学省研究開発指定校研究第2年次となります。現在は、新研究主題の下、新設教科「グローバル人材育成科」も含む、各教科の教育課程編成や単元開発に取り組んでいます。

数学科

関数を日常生活に生かす方法を考え、話し合う。

道徳

話合いを通して、自分と他者の存在を見直す。

国語科

執筆した随筆について助言をもらい推敲する。

技術・家庭科

郷土料理への理解を話合いで深め、調理に生かす。

持続発展科

地域商店街活性化のプランを考え、話し合って改善する。

美術科

シャドーアートの完成を目指し、意見交換と試行を繰り返す。

課外活動紹介!!

男子アイスホッケー部

日々の活動

男子アイスホッケー部はリージョンプラザ上越にて毎週火曜日と木曜日に練習を行っています。

練習には、地元のアイスホッケー経験者の方々に来ていただくことはありますが、指導者という立場の方はいらっしゃいません。その中で、毎回練習前後・試合後などには、全員で集まってビデオカメラで撮影した自分たちのプレイを客観的に見ながらお互いが意見を出し合っています。また、プロの試合や国体、インターカレッジ本戦など、レベルの高い試合を実際に足を運んで観に行くことで、アイスホッケーというスポーツを日々勉強しています。

アイスホッケー、知っていますか？

近年、スマイルジャパンと称され、女子アイスホッケーの国際試合が注目を浴びており、数年前に比べればメディアに取り上げられる回数が多くなってきました。しかし、アイスホッケーはまだまだ日本ではマイナースポーツとして位置付けられ、競技人口は少なく、知名度はあまり高くありません。

アイスホッケーは最高のスポーツ！

アイスホッケーというスポーツは、「氷上の格闘技」とも呼ばれ、氷の上で体がぶつかり合う様子はとても迫力満点です。バスケットボールのように展開が早く、サッカーのように１点に重みがあり、格闘技のように激しい、そんなスポーツに一目見た時から魅了されてしまった27人（プレイヤー20人・マネージャー７人）で楽しく活動しています。

ほとんどが大学に入って初めてスケート靴をはいたという初心者の集団です。しかし、アイスホッケー経験者のいる他大学に勝てるよう頑張っていきます！

今後の活動

リージョンプラザ上越で大会を行うこともあり、誰でも観戦できますので興味のある方はぜひ一度訪れてみてください。試合成績や今後の活動などに関しましてはTwitterに上越教育大学男子アイスホッケー部のアカウントがありますので、是非チェックしてみてください。
→@1134qr

DATA
平成28年1月現在
部員数／27人
活動日／毎週火曜日、木曜日
活動場所／リージョンプラザ上越

【取材協力者】
学部4年　生活・健康系コース（家庭）
阿部聖大

管弦楽団

アットホームな管弦楽団

学部生・院生合わせて19人と少人数の部活のため、１人１人の距離が近く、和気あいあいとした雰囲気で楽しく活動しています。管弦楽団という名前ですが、現在はヴァイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスと、弦楽器のみで活動しています。団員はイベント好きで、BBQやハロウィン、クリスマスなど季節のイベントがある月は、皆で出かけたり、お菓子を広げて盛り上がったりしていますよ。

ほとんどの団員が初心者！

団員19人中15人は大学から弦楽器を始めました。指を押さえる場所に何も印がない弦楽器なんてハードルが高い！と思っている人、安心してください！最初は楽器に印をつけて弾きやすい工夫をしています。２か月の練習でちゃんと曲が弾けるようになりますよ。弦楽器を演奏することは楽しいだけでなく、自分の特技にもなります。実際に団員の中には、弦楽器演奏という素敵な特技を手に入れて、実習校で披露してきた人もいます。

また、管弦楽団では、ポップスからクラシックまで幅広いジャンルの曲を、サマーコンサートや越秋祭など様々なイベントで演奏します。１年の最後を飾る定期演奏会では、団員揃ってのフォーマルなステージに加え、自由なメンバーで、曲のテーマに沿った個性豊かな衣装で演奏するステージもあります。このように、主人公になって演奏できる機会があるところも面白いです。

ちっちゃい部活だからこそ

私は、部活を通して忍耐力、探究心、他人の協調性など、多くの事を得ることが出来ると考えています。当団は小規模な部活ということもあり、１人１人の役割が大切です。そのため、日々の練習やイベントの準備を通してしっかりとこれらの力を培うことが出来ます。練習で楽器が上手になることも嬉しいですが、自分の人間性や考え方が成長したと感じられた時も嬉しいですね。

DATA
平成28年1月現在
部員数／19人
活動日／毎週月、火、木曜日（18:30～21:00）
活動場所／音楽棟301教室
活動実績／サマーコンサート、JAMフェス、越秋祭演奏、定期演奏会

【取材協力者】
学部3年　言語系コース（英語）
椿　悠菜

上教大なんでも掲示板

辰野千壽（たつのちとし）教育賞授与式を挙行 ～受賞者の喜びの声～

平成27年10月2日（金）に「第8回辰野千壽教育賞」授与式を挙行しました。今回は最優秀賞1名、優秀賞1名に賞状が授与されるとともに副賞が贈呈されました。

最優秀賞を受賞した水谷徹平氏（新潟県長岡市立脇野町小学校教諭）のテーマは「リアルな現実をみつめ、思いや考えを深めるいのち教育の実践～9歳半の節以降の小学生児童の表現行為を視点に～」、優秀賞を受賞した長田洋一氏（愛知県碧南市立大浜小学校教諭）のテーマは「発達障害児の集団適応を促進する校内支援体制づくりを目指して－ADHD児に対して全職員の共通理解を図り、協力を呼びかけた事例－」というもので、いずれも意義あるものとして高く評価されました。

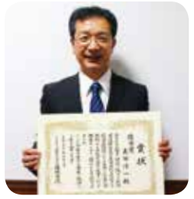
同教育賞は、平成20年度に創立30周年を記念し、初代学長である辰野千壽氏の長年にわたる教育・研究業績の精神を受け継ぎ、我が国の教育に多大な影響を与える優れた教育・研究の振興に貢献するため創設され、8回目となる今回は応募総数が20件でした。

水谷 徹平 氏
（新潟県長岡市立脇野町小学校教諭）
【テーマ】リアルな現実をみつめ、思いや考えを深めるいのち教育の実践
～9歳半の節以降の小学生児童の表現行為を視点に～

この度は栄誉ある辰野千壽教育賞最優秀賞を頂き、大変光栄に思っております。自分自身が経験した白血病闘病から、小学校現場においてどのようにいのち教育を具現していくかを考え、試行錯誤をしながら教育活動を行ってきました。直接いのちについて考えるだけでなく、現実の社会や地域のさまざまな人、もの、こととかかわり、思いや願いを表現してかかわっていく経験そのものが、子どもがいのちを輝かせて生きていくことにつながるのではないかと実践を行っているところです。

上越教育大学附属小学校勤務の際には、本学の先生方から多くのご指導やご指摘を頂きながら実践を重ねたり、上越教育大学教育実践研究での論文執筆や教育実践研究発表会での質疑を通じて知見を深めたりさせて頂いて、本受賞につながりました。

今後とも、子どもに寄り添いながら、変化の激しい社会の中で豊かに生きていく子どもを育むことができるよう、実践を重ねていきたいと思います。



長田 洋一 氏
（愛知県碧南市立大浜小学校教諭）
【テーマ】発達障害児の集団適応を促進する校内支援体制づくりを目指して
－ADHD児に対して全職員の共通理解を図り、協力を呼びかけた事例－

この度は栄誉ある辰野千壽教育賞をいただくことができ、大変嬉しく思っております。

本研究は、発達障害児の集団適応を目指し、通級指導担当教員および特別支援教育コーディネーターの立場から「学級担任に対するコンサルテーション」「通級指導教室における個別指導」「校内委員会における教員間の共通理解と連携」の3つの策を講じたところ、対象児童の級友との対人関係が改善され、自信が回復するまでの経緯を報告しました。

発達障害児に関する実践および研究は、今から14年前に小学校に勤務しながら夜間大学院へ通い、学習障害児をテーマに修士論文を作成した時から継続して取り組んできました。その間、大学教授をはじめ、多くの先生方からご教示いただいたことが今回の受賞につながったと考え、お世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

現在は教員の傍ら再び大学院（博士課程）に在学し、修行を積んでいる身であります。この賞を励みに、学位論文の完成を目指し、さらに精進努力を重ねていきたいと思います。

■辰野千壽 初代学長（95歳）におかれましては、平成28年1月20日（水）にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表しお知らせいたします。

地域貢献事業　外国人児童生徒への修学支援プロジェクト「外国につながる子どもたち」への教科指導等に関する勉強会を実施

全3回にわたり、「外国につながる子どもたち」への教科指導等に関する勉強会を実施しました。「外国につながる子どもたち」に学習支援を行う学生の養成及び対応できる教員の養成を目的として実施したものです。

第1回（6月28日）は本プロジェクトが基盤とする学習モデルである「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」を発案された筑波大学の岡崎敏雄名誉教授をお招きし、研究動向や理論的枠組み、子どもたちの母語を生かした具体的な実践について、アニメ教材や絵本を用いグループ活動も交えお話しいただきました。

第2回（11月25日）は、上越国際交流協会の佐藤睦子事務局長、外国出身の保護者である石川ルース氏、大﨑ジェナリン氏をお招きし、「教員と外国出身の保護者とのコミュニケーション」をテーマに、佐藤氏からは教員と保護者の想いの相違、両者がコミュニケーションする際の工夫等をお話しいただきました。石川氏と大﨑氏からは日本での子育て経験や出身国との教育制度の違い等について語っていただき、外国出身の保護者の思いを直接聞くことができました。

第3回（12月7日）は学生がこれまでの自身の学習支援を振り返り、その実践や工夫した点などの発表と情報交換を行いました。児童生徒の母語・日本語の力に合わせた課題を設定し、教科書以外にもかるたカード、絵本、動画、アプリ等を駆使するなど、子どもたちが母語・日本語・教科学習への関心を高め、内容の理解へ結び付ける工夫が報告されました。

全体を通して約50名の学生と教職員が参加し、どの回も活発な意見交換が行われました。今回の勉強会により、学生は子どもたちの学びを様々な角度から考える視点を養うことができたと考えられるため、今後も学生の養成に力を入れ、修学支援の充実・向上を図ります。

（平成27年度新潟県国際交流協会「国際化推進活動助成金」により実施しました。）

「上越教育大学基金」ご寄附のお願い

上越教育大学では、法人の財政基盤の強化を図るとともに、独自の学生支援や教育・研究活動支援等の諸事業を推進し、本学の教育・研究機能の強化と魅力づくりに努めることを目的に「上越教育大学基金」を平成26年11月に設置しました。

企業、団体、個人のみなさまからのご支援をお願い申し上げます。

基金が行う事業
○学生支援事業　○国際交流支援事業　○教育研究支援事業　○地域貢献事業
○附属学校整備事業　○キャンパス環境等整備支援事業　○その他本法人の諸活動支援事業

税法上の優遇措置
〔個人の皆様からのご寄附〕
所得税控除等を受けることができます。
〔法人の皆様からのご寄附〕
寄附金の全額を損金に算入できます。

寄附の申込み
〔振込用紙によるご寄附〕
上越教育大学基金のホームページ「寄附申込フォーム」より、振込用紙をご請求ください。
〔現金によるご寄附〕
現金でのご寄附を希望される方はお手数ですが、お問い合わせ先までご連絡ください。

お問い合わせ先
上越教育大学総合交流推進室（上越教育大学広報課内）
〒943-8512 上越市山屋敷町1番地　上越教育大学事務局（2階）
TEL 025-521-3255　FAX 025-521-3627　E-mail：kikin@juen.ac.jp

修了生からのお便り

上越教育大学での学び

私は、これまで3回上越教育大学にお世話になっています。

1回目は、ストレートマスターとして生活・健康系コース（保健体育）で、故丸山芳郎先生の体育科教育学研究室でお世話になりました。現職の先生がとても多く、個性豊かな方ばかりでした。研究のために、群馬県や新潟県の小・中学校の授業をたくさん見せていただいたのが思い出です。また、体育コースはスポーツの好きな仲間ばかりで、冬には研究室よりもスキー場にいる時間の方が長いという猛者が多くいました。携帯電話がまだ普及していなかった当時は「会いたければ研究室ではなく、スキー場に行け」という笑い話もありました。

2回目は、現職派遣として臨床心理学コースの宮下敏恵先生の研究室でお世話になりました。臨床心理士の受験資格を得られるこのコースでは、実習が多くありました。附属の心理教育相談室や病院実習など、教員をやっている時には見ることのない世界でした。何度もめげそうになりましたが、臨床心理士を目指すストレートマスターや現職の先生に支えられながら多くのことを学びました。ここでの学びは、様々な理由から心の問題をもつ子供たちと接する際に生きています。

3回目は現在進行中です。現職のまま博士課程に籍を置き研究を進めています。仕事をしながら調査をしたり、論文を書いたりするのは大変ですが、実践に生かすことのできる研究を進めています。

私がこれまで3回も上越教育大学にお世話になっているのは、高い専門性をもつ先生方の存在、現職教員とストレートマスター、学部生との交流が刺激になるところや学生が教員志望であり目指すベクトルが同じで一体感があるところなど、たくさんの魅力があるからです。ぜひ多くの皆さんに、上越教育大学で学んでいただきたいと思います。

大門 秀司
（だいもん しゅうじ）

富山県出身。富山大学卒業後、平成９年３月生活・健康系コース（保健体育）修了。北海道公立小学校教諭、富山県公立小・中学校臨任講師、教諭。平成22年３月学校教育専攻臨床心理学コース修了。平成23年臨床心理士資格取得。平成27年４月より兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程在籍。所属は上越教育大学大学院臨床心理学コース宮下敏恵研究室。

大学院同窓会

上越教育大学大学院同窓会とともに

会員の皆様には、それぞれの地域、それぞれのお立場でご活躍のことと拝察し、お喜び申し上げます。私は、昭和60・61年の最後の大雪の時に、障害児教育専攻の院生としてお世話になり、その後、養護学校の副校長や教育センターの指導主事を経験しました。大学院修了後は、指導教官だった星名先生を囲んで「聴音研」（聴覚と音楽の研究会）が年1回赤倉であり、スキーをしながら研究発表や院生の修論検討会などに参加してきました。学会での自主シンポジウムにもつながり、大きな力になりました。その後、平成14年1月から本学教員となり、同窓会の理事、そして、中村雅彦先生の後を引き継ぎ、平成23～25年度に大学院同窓会の事務局長の仕事をさせていただきました。

理事になったときに、同窓会の規約や役員などの組織、各都道府県の支部活動、会員名簿の管理、各種助成などが、とても充実したものであることを改めて知りました。特に、海外教育研究助成、卒業生・修了生への研究助成、院生協議会助成、後援会助成、学生支援・就職支援助成、支部及び各専攻コース等の同窓会助成など、予算面でも充実していることもわかりました。そこで、障害児教育専攻・特別支援教育コースの同窓会を企画し、修了生の長澤先生（新潟大学）、三浦先生（山形大学）、武田先生（和歌山大学）の講演会、新潟県内の教育委員会や特別支援学校の教頭先生によるシンポジウム、そして、青森県で出前同窓会を行いました。講師の旅費、会場費、発送費、事務費など、大学院同窓会の助成を受けることができました。

また、同窓会事務局長となってから、各都道府県の支部が活発に活動していることを知り、年に1回は活動報告をいただき、懇親を深める場を用意する必要を感じました。そこで、規約にあるように理事会を開き、評議員会開催の準備に当たりました。7月、学長・副学長にもご出席いただき、直江津学びの交流館2階多目的ホールで各都道府県の支部の代表にもご参加いただき、評議会を開催することができました。

上越教育大学は、平成16年に国立大学法人上越教育大学となり、平成20年には教職大学院が設置され、ますます充実した研修、研究の仕組みが整いましたが、一方で、大学を取り巻く厳しい状況もあります。現場の教員の研修、研究をより充実していくためにも、また、教育現場で当面する諸課題の解決のためにも、修了生同士や修了生と大学の連携が益々重要となっています。そのようなことからも、同窓会及び各都道府県の同窓会支部が大きな役割を果たすものと考えます。

現在の同窓会及び支部を組織化していく上で、元学長の渡邉先生、亡き戸北先生には大きな支えとなっていただきました。また、事務局長として中村先生には現在の基礎を築いていただきました。これからの大学院同窓会の運営は、益々大学と連携することが重要であり、教育現場の諸課題に立ち向かっている修了生と手をつなぎ合い、支え合っていくことが必要だと考えます。

上越の海と山と大地は、昔も今も変わっていませんし、そこで暮らす人々のやさしさも現在につながっています。大学院同窓会で今後もつながっていきましょう。

臨床・健康教育学系
特別支援教育コース
齋藤 一雄

齋藤一雄先生は、平成28年3月を以って上越教育大学を定年退職なされます。大学院同窓会理事、同事務局長として、各県支部活動の充実、大学院同窓会評議会の設立と運営に、多大なご尽力とご貢献をいただきました。大学院同窓会を代表し深く感謝し、御礼を申し上げます。まことにありがとうございました。これからも、大学院同窓会にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

上越教育大学大学院同窓会長　井澤 文夫

修了生の住所等をお知らせください

転居・転職・結婚等により個人情報の変更があった場合は、お知らせください。
詳細については、公式ホームページをご覧ください。

上越教育大学　同窓会　検索

お問い合わせ先　上越教育大学大学院同窓会事務局
E-mail:dousoukai@juen.ac.jp

退職教員から皆さんへ

人文・社会教育学系

教授　加藤 雅啓

プロフィール

1989年9月、助教授として着任。1998年4月、教授に就任。専門は言語学、英語学。

ノスタルジアと「星に願いを」

ある日、大学院の指導教員から「九州の大学で人を探しているが行く気はあるか」と尋ねられ、「お願いします」と応えるだけで就職が決まった。書類審査も面接もない、のどかな時代だった。

３月下旬、受入大学の教授が民間アパート 2LDK をすでに契約していた。家賃や敷金・礼金など何も知らされなかった。そんなものだと思い、礼を言った。引っ越し荷物の整理が一段落する頃、すでに日は沈んでいた。ほっと一息つき、西側の窓に立つと、闇を裂く一条の光の帯が山裾から現れ、他方の山裾に消えていった。長崎本線の寝台特急「さくら」の明かりだ。「あの列車に乗れば、明日の昼には東京に戻れる。」唐突にこんな衝動が身体を突き抜けた。

このような感情をノスタルジアと呼ぶらしい。その語源はギリシャ語の【nostos】（家へ帰る）と【algia】（苦しんでいる状態）に由来しており、故郷へ帰りたいと切なく恋い焦がれるという意味を持つとのこと。

しかし、新学期が始まると故郷のことなどすっかり忘れた。前を向き始めた証拠だ。この春、新潟を離れ、36 年ぶりで東京の実家に戻ることになる。はたして星に願いを掛けることができるのか。はたまたノスタルジアは何処に向かうのだろうか。思いはつきない。

学校教育学系

教授　川村 知行

プロフィール

1985年4月、講師として着任。助教授を経て、2003年1月、教授に就任。専門は地域課題教育、美術史学。

文化財研究調査はライフワーク

上越に赴任したのは昭和 60 年の春だった。日本美術史が専門なので、東京から京都と奈良に通うことで日本のことは理解できると、それまで思っていた。土地勘のない土地で、文化も歴史もわからないもう一つの日本があって、その方が広いことに気づかされた。最初の３年間はひたすら地域の人々から教えて頂いたが、４年目には教える立場になった。きっかけは昭和63 年１月の五智国分寺本堂の焼失である。東大寺の大仏殿は２回全焼しているが、目の前で寺院が炎上する光景を目の当たりにしたことは人生を変える衝撃だった。この年、上越市の文化財調査審議会の委員になった。以来 30 年、文化財の調査と保存に尽力してきた。全国と東アジアに行動半径を広げることで、得られた成果は地域教育の講義演習に還元して、欧米の大学でも日本をセールスできた。京都の醍醐寺、奈良の東大寺に加えて、越後の仕事もライフワークになった。大学には定年があるが、研究には幸いなことに定年がない。研究者冥利に尽きる幸福である。

臨床・健康教育学系

教授　齋藤 一雄

プロフィール

2002年1月、助教授として着任。2006年4月、教授に就任。専門は障害児教育及び知的障害教育課程・指導法。

人生の第三楽章

「いま、あなたは人生の第○楽章ですか？」と交響曲を人生にたとえて、あるＦＭの音楽番組から問いかけがありました。「私は、いま、人生の第３楽章でしょうか？」と答えてみたいと思いました。交響曲によって楽章の構成は、若干異なりますが、ベートーヴェンの交響曲第９番の第３楽章を思い浮かべて、この上越教育大学での 15 年間がそれに当たるのではないかと思いました。しかし、この後、歓喜の時を迎えるには体力的に厳しいものがありますので、同じ第３楽章でも、ブルックナーの交響曲第９番のように、静謐に限りなく上昇していく第３楽章が続くのでもよいのかもしれません。

人文棟８階の研究室からは、真っ白に雪化粧した越後駒ヶ岳、八海山、中ノ岳が見えます。妙高山や米山も神々しいほどです。春になりますとショウジョウバカマやイカリソウが咲き、そして桜が咲き誇ります。自然豊かで気持ちの温かい上越に感謝申し上げます！

臨床・健康教育学系

教授　土谷 良巳

プロフィール

2003年1月、教授として着任。専門は重複障害教育。

Bon voyage!

人生は出会いであると言いますが、別れの時がくることを避けられません。出会いや別れだけでなく、岐路に立つこともたびたびあります。この３月、私は多くの修了生、卒業生の皆さんと共に、13 年余りを過ごした上越教育大学に別れを告げる日を迎えました。そしていま、一つの岐れ道にたたずんでいます。これからは、上越教育大学の皆さんとは別に新たな航路を進むことになりますが、上越教育大学でのこれまでの日々が後押ししてくれることでしょう。きょうまでのひとつひとつの出会いに感謝申し上げつつ、上越教育大学の行く手が順風満帆であることを祈念しております。Bon voyage!

人文・社会教育学系

教授　野村 眞木夫

プロフィール

1994年4月、助教授として着任。2001年４月、教授に就任。専門は日本語学、言語学。

座右の銘など……

この原稿の依頼をいただいた頃、風邪のつもりで病院を訪れたところ、気管支炎である、肺炎を疑う必要もあると脅され、胆を冷やしました。結局は気管支炎で落着しました。焼きが回ったわけで、良い引き際だと安心しました。いや、引き際とは要職にある人に用いるので語法に誤りがありますね。

研究・教育は文章・文体が専門ですが、これは大学院の先生が時枝誠記の直系だったからです。その後、談話分析、マルチモーダル分析、絵本研究などに拡張しています。すべてセミナーの諸氏の関心に応じてのことです。この大学・大学院の皆さんがいたからこそ、上記のような展開が可能になりました。

こんな研究課題は経験がない、大変な問題を思いついてくれたな、というときほど面白い結果が生まれてきます。

ここ数年、座右の銘にしているのは「老年ボケやすく学ほとんどならず」（やなせたかし）という言葉です。そんな日々を皆さんと楽しく過ごしていきましょう。多謝。

自然とバランス

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

太陽の輝きが増し、草や木が花をつけ、虫たちも活発に動き回る季節となりました。

この有名な句は、小学校や中学校の教材として使われ、人口に膾炙（かいしゃ）しています。自然の情景を素直に詠んだものながら、実に多くの内容を含んでいて、きわめて多様な鑑賞が可能であると思います。まず、うららかな春の一日が終わり、ほっとした気持ちが伝わってきます。そして、この句の一番の特徴は、月と日、東と西、昼と夜、菜の花と月の黄色と夕日の赤色など鮮やかな対比です。さらには、天と地、光と影なども織り込んでいます。自然現象に表の部分と裏の部分があるように、全てのものは光と影の部分を有しています。

良い面と悪い面があることは、子どもも同じです。教育において子どもの良い面を伸ばすことは大変重要です。また、子どもたちにはそれぞれ個性があるので、多くの子どもたちを様々な場面で区別することも大切です。区別する際には客観的な基準を用いる必要があります。多くの人が認めることのできる基準を用いないで区別してしまうと差別となります。教師にとって区別することは大変重要な業務です。客観的な基準を用いることは、客観的にものをみることにもつながります。子どもの様子や気持ちを客観的に把握するためには、いかに子どもの立場に立ってものをみることができるかにかかっています。

自然から発信される情報は無限でしかもバランスが取れています。それをどう受け取りどう解釈するかは、全て受け取る側に委ねられています。感受性を磨く努力が必要で、それは教育に活かすことができます。自然は、必ずバランスが取れています。私たちにも同じことがいえます。例えば、労働と休息、すなわち働いたら休むことが必要です。大自然の中では、そんなありきたりのことも身近に感じることができます。

上越地域の春は天気が良い日が多いので、日常の様々なことを離れて、自然を満喫する機会を持つことが容易にできます。お気に入りの場所を見つけることや、新しい発見があるかもしれません。おすすめは、上越市では、シーサイドパーク（名立区）、米と酒の謎蔵（三和区）、坊ヶ池（清里区）、光ヶ原高原（板倉区）、妙高市では、高床山森林公園（新井）、苗名滝（妙高高原）、糸魚川市では、神道山公園（能生、1、088段の石段）、高浪の池などです。いずれも道幅が狭いので、車の運転には十分注意して下さい。

学長　佐藤芳徳

インタビュー 大学院で輝く人

大学院2年
臨床心理学コース
印銀 清佳（いんぎん さやか）さん

上越教育大学との出会い

「臨床心理士」ってどのような仕事なのかな？私も臨床心理士の資格を取得するための学びを通して、教育現場に、何か還元できないのかな？ このような自問自答をしていた時に、本コースが日本臨床心理士資格認定協会の第一種指定校であることを、修了生である先輩教員から聞きました。

私自身、新潟県教育委員会から２年間派遣された特別支援学校に勤務する現職教員です。そのため、日々、勤務する中で「こころ」や「行動」に解決困難な問題を抱える児童生徒のみならず、周りの教師や保護者といった支援者が抱える問題の深刻さにも直面してきました。この問題を解決・改善並びに予防し、援助するために、心理療法や行動療法などの理論と技法を体系的に学び、高度な専門性を身につけることを目指して、本学の大学院の入学を決めました。

大学院での充実した生活の理由

私は、応用行動分析の立場から、教育現場で特別な支援を必要とする児童生徒が示す問題行動の支援方法に関する研究を進めています。

さらに、大学附属の心理教育相談室では、丁寧できめ細かいスーパーヴィジョンのもと、様々なこころの問題、発達障害、選択性緘黙、不登校などのケースを直接担当させていただく中で、密度の濃い臨床実習も行っています。このような充実したカリキュラムは、大変魅力的であり、学部を卒業したばかりのストレートの方々、全国から集まる現職教員の仲間と切磋琢磨し、共に学び、課題に対して、納得いくまで本質的な追究をしています。 この仲間達や先生方との語り合いや励ましを受けて、目標を見失うことなく、院生生活を送ることができています。

目指している教師像

この学びを修了の瞬間に終わりとせず、２年間の研究の成果や、臨床実践能力を現場に生かすことができるように、常に自分自身を問い、学ぶ姿勢を大切にしていきます。それが、高度専門職業人としての私の目指す教師像です。

■ 聞き手・文（写真左より）
大学院1年　臨床心理学コース　倉部 知博
大学院1年　臨床心理学コース　酒井 武志
大学院1年　臨床心理学コース　大森 五月
大学院1年　臨床心理学コース　木谷 文香
（中央・本人）

インタビューを終えて

印銀さんは、これまで特別支援教育の分野において多くの実践研究を積まれている教員です。

大学院入学を機に、臨床心理学という学問に出会い、まだまだ学び足りないと、日々、人一倍努力されていることをインタビューから再認識しました。

いつも物腰が柔らかく、誰に対しても笑顔で接し、その場を和やかにする姿に好感がもてます。また、誰よりも朝早く院生室に来て、夜遅くまで図書館にという研究姿勢には本当に頭が下がります。

専門的な側面だけでなく、何事にも知識の深さと、スピーディーな行動力をもつ印銀さん。今後も、新潟県の子ども達、保護者、教職員のために活躍の場を広げていただきたいと思います。

アンケートにご協力ください
公式ホームページにおいて本誌に関するアンケートを実施しています。左の QR コードを読み込むことで、携帯端末からもご回答いただけます。
QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

国立大学法人
上越教育大学
Joetsu University of EducatioN

JUEN　上越教育大学学園だより
2016 春 No.33（平成28年3月発行）

編集・発行
上越教育大学情報・広報委員会
デザイン・監修
安部 泰
（芸術・体育教育学系　准教授）
制作
株式会社桐朋

お問い合わせ先
上越教育大学広報課
〒943-8512
新潟県上越市山屋敷町1
TEL 025-521-3626
FAX 025-521-3627
E-mail kouhou@juen.ac.jp
URL http://www.juen.ac.jp/
公式ホームページから、
バックナンバーの閲覧ができます。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

※本誌掲載の文書・記事・写真等の無断転載はお断りします。